

《資料》

竹幽文庫蔵『源氏千種香』の紹介（五）

—— 19 薄雲香／24 胡蝶香 ——

本稿は、矢野環・岩坪健・福田智子「竹幽文庫蔵『源氏千種香』の紹介」（『社会科学』第43巻第3号、二〇一三年一月）、および同「竹幽文庫蔵『源氏千種香』の紹介（二）」1 桐壺香／6 末摘花香」（『社会科学』第43巻第4号、二〇一四年二月）、同「竹幽文庫蔵『源氏千種香』の紹介（三）」7 紅葉賀香から12 須磨香」（『社会科学』第44巻第1号、二〇一四年五月）、竹幽文庫蔵『源氏千種香』の紹介（四）13 明石香／18 松風香」（『社会科学』第44巻第2号、二〇一四年八月）の続編として、19 薄雲香から24 胡蝶香までの組香のうち、すでに『社会科学』第43巻第3号で紹介している玉鬘香を除く五つの組香の翻刻と考察をおこなうものである。資料に関わる基本的な説明は『社会科学』第43巻第3号を参照されたい。また、凡例および香道用語解説は、『同』第43巻第4号に詳述しているので、本稿では、以下にその概略を記すにとどめる。

矢野環  
岩坪健  
福田智子

凡例

- 一、翻刻本文は、底本の原態を尊重しつつ、漢字・仮名ともに通行の字体を用い、適宜、句読点を施す。また、朱書きには、「（朱）」と示し、一面の終わりには「〃」を付して丁数を記す。
- 一、考察には、（1）竹幽本組香の方法、（2）『源氏物語』との関わり、というふたつの観点を設ける。（1）の冒頭には、構造式を記す。また、解説を要する香道用語には「※」を付す。それらの用語については、「香道用語解説」（『社会科学』第43巻第4号）を参照されたい。
- 一、巻末には影印を付す。

# 19 薄雲香

## 【翻刻】

△薄雲香

入日さす峯にたなひくうす雲は

物おもふ袖にいろやまがへる

一 十炷香の札を用ゆ。

一 明石上の香、中宮の香、紫上の香、各一包充、二葉松の香

三包<sup>ウナリ</sup>香、武隈松の香五包<sup>香是もウナリ</sup>香也、都合十一包打交て一包充焚出

し、皆終て包紙を開くべし。」<sup>六五オ</sup>

一 地香外に拵へ試に出す。両客香は試なし。

一 札打様

明石上に 一の札 中宮に 二の札

紫上に 三の札

二葉松に <sup>ウ月一</sup>ウ月二 <sup>ウ月二</sup>ウ月三 此内三枚打べし

武隈松に <sup>ウ月一</sup>ウ月二 <sup>ウ月二</sup>ウ月三 <sup>花二</sup>花二 <sup>花三</sup>花三 <sup>花三</sup>花三 此内五枚打べ

し。

両客香は試なき故に、初に出たる試なき香には、定て」<sup>六五</sup>

ウ月一の札をうつ。此香三炷にて、終は是二葉松の香と知

る。もし又四炷續て出れば、花一花二の札を増て打つべし。

五炷にて終るは是武隈松の香なり。

又其次に別香出ればウの札をうつ。此香三炷に終は二葉松

の香なり。もし四炷續かば花二花三の札を増てうつ。是武隈松の香と知るべし。」<sup>六六オ</sup>

一 記録点は、地香独聞二点、二人より一点充、聞違、独は星

三つ、二人より二つ充付るべし。二葉松、独聞五点、二人

四点、三人より三点充、聞違星なし。武隈松初炷目一点、二

炷目二点、三炷目三点、四炷目四点、五炷目五点充なり。聞

違星なし<sup>聞中たる炷数にてはなし。出香の度によつて点違也。</sup>。皆中は聞の下に褒美に薄雲と認べ

し。記録の例大概左のごとし。」<sup>六六ウ</sup>

薄雲香之記

〔表〕<sup>六七オ</sup>

## 【考察】

(1) 竹幽本組香の方法

明石上 一

中宮 二

紫上 三

二葉松 3 月一・月二・月三あるいはウ3枚

武隈松 5 ウ3枚と花二・花三

あるいは月一・月二・月三・花一・

花二

本香として、<sup>\*</sup>地香は「明石上」「中宮」「紫上」各一包、<sup>\*</sup>客香

は「二葉松」三包と「武隈松」五包の以上十一包を準備する。本香の前に、地香のみ、別途試香<sup>\*</sup>を行う。本香は、一包ずつ焚き、すべて焚き終わってから包紙を開き、正答を披露する。

答えには十炷香札を用いる。一炷ごと<sup>\*</sup>に回ってくる折居に札を打つ<sup>\*</sup>。「明石上」には一の札、「中宮」には二の札、「紫上」には三の札を打つ。客香の「二葉松」と「武隈松」には試香がないたため、最終的に三柱焚かれた香を「二葉松」、五柱焚かれた香を「武隈松」と判断することになる。

まず、試香になかった香が初めて出た時に「月一」の札を打ち、これと同じ香には、「月二」「月三」の札を打っていく。これ以後、同じ香が出なかった場合は、「二葉松」であったと判断される。もし、同じ香が続いて出たならば、「花一」「花二」と打っていく、これが「武隈松」であったことを知る。

また、試香になかった香のうち二種類目が出た時は、「ウ」<sup>\*</sup>の札を打ち、これと同じ香に「ウ」の札を打っていく。三炷で終われば「二葉松」ということになり、さらに二炷続けば「花二」「花三」と打っていく、「武隈松」であったことがわかる。

つまり、二種類の客香は、各々三炷目までは「月一」～「月三」と「ウ」三枚に分けるのみで、「二葉松」「武隈松」の区別は当然できないが、四炷目に「花一」と打てば「月一」～「月三」と同じ香、「花二」と打てば「ウ」三枚と同じ香を「武隈

松」と判断したことになる。札の使い方が巧妙である。

記録点は、地香の場合、<sup>\*</sup>独り聞き二点、二人以上では一点、一人のみ聞き違えた時は星三つ<sup>\*</sup>、二人以上では星二つを付ける。客香「二葉松」の独り聞きは五点、二人では四点、三人以上では三点を加え、聞き違えた時の星は付けない。また、客香「武隈松」では、初炷目を聞き当てれば一点、その後五炷目まで、一点ずつ点を増やして加点する。何炷聞き当てたかではなく、あくまでも出香の順序による加点であることに注意しておきたい。なお、聞き違えても星を付けないのは「二葉松」と同じである。十一炷のすべてを聞き当てた場合は、褒美として記録の下端に「薄雲」と記す。

蘭之園本では、試香のない四包に試香のある「薄雲」一包を混ぜ、「薄雲」を聞き当てる。他の四包は聞き捨てとし、<sup>\*</sup>名乗紙に答えを記す。竹幽本とは、<sup>\*</sup>出香の数をはじめとして全く方法が異なり、非常に簡便な組香になっている。

## （2）『源氏物語』との関わり

卷名歌は薄雲の巻で亡くなった藤壺を偲ぶ光源氏の詠歌である。『源氏小鏡』<sup>1</sup>ではいずれの系統も、藤壺の死しか取り上げない。だが、物語では明石の君が実の娘（明石の姫君）を手放し、紫の上の養女にすることも語られている。本組香は、この物語の内容に着目して作られている。

香の名目に見られる「二葉松」と「武隈松」は、明石の君が娘を源氏に手渡したときに、二人が詠み交わした和歌による。

未遠き二葉の松に引き別れいつか木高き影を見るべき(明

石の君)

生ひそめし根もふかければ武隈の松に小松の千代をならべ

ん(源氏)(②四三四頁)

また、「明石上」「中宮」「紫上」の三つの名目のうち、「中宮」

は、明石の姫君を指すのであろう。前述のとおり、「明石上」は

実母、「紫上」は養母にあたる。このときまだ明石の姫君は三歳

ではあるが、たとえば源氏系図では、鎌倉時代書写の九条家本

から、近世に流布した版本『源氏物語湖月抄』所収本に至るま

で、明石の姫君は「明石中宮」と称されている。

なお、薄雲の巻においては、物語に「中宮」の呼称は見当た

らず、『源氏小鏡』では、藤壺を指して用いられる。

## 20 謹香

### 【翻刻】

△謹香

みしおりの露わすられぬ朝顔の

花の盛は過やしぬらん

一 謹齋アサガホノサイイン院の香、女五宮ゴノミヤの香、源内侍ゲンノナリシの香、各三包、桃園宮

の香一包客香、都合十包出香とし、皆焚終て包紙を開くべし。

一 地香三種外に拵へ試に出す。客香試なし。」六七ウ

一 札打様左のごとし。

初に出たる謹齋院の香には おり位の札

初に出たる女五宮の香には 伯母君の札

初に出たる源内侍の香には 年経るの札

右各二炷目よりは、異名の札を打違うつべし。

二炷目三炷目謹齋院には 女五宮の札」六八オ

二炷目三炷目の女五宮には 源内侍の札

二炷目三炷目の源内侍には 謹齋院の札

假令、謹齋院の香に源内侍の札打たるは異名なれども中り

にあらず。又、初香の女五宮を間違、二炷目に伯母君の札

を打たるは、同香なれども、是も中に成らず。餘皆是に準

知べし。」六八ウ

一 記録は、中り斗を記す。初香聞一点、二炷目聞二点、三炷

目聞三点かくる。何人聞にても同前也。桃園の香、独聞五

点、二人より四点充なり。二炷目より同名の札打たるは、星

一つ充附る也。

一 札数壺人前拾枚、十人分百枚也。

札表

一 十炷香の札紋に同し。」六九オ

札裏

槿斎院 二枚 女五宮 二枚 源内侍 二枚  
 桃園宮 一枚 おり位 一枚 伯母君 一枚  
 年ふる 一枚

一 記録書様左に記す。 六九ウ

槿香記

〔表〕 七〇オ

# 【考察】

（一）竹幽本組香の方法

槿斎院  
 女五宮  
 源内侍  
 桃園宮

1 3 コ 10

本香は、「槿斎院」「女五宮」「源内侍」の香を各三包、「桃園宮」の香を一包の計十包を出香とする。このうち「桃園宮」は客香である。残り三種類の香は地香で、本香の前に、別途、試香をおこなう。本香では、一炷<sup>\*</sup>ずつ焚き、すべて焚き終わってから包紙を開いて答えを披露する。

答えには、専用の札を用いる。一人十枚を必要とし、十人の香席では百枚を用意する。札の表は十炷香札と同様であるが、裏

は、「槿斎院」「女五宮」「源内侍」（以上、各二枚）、「桃園宮」「おり位」「伯母君」「年経る」（以上、各一枚）と記す。

札の打ち方は、とくに地香について注意を要する。「槿斎院」の香に「槿斎院」の札を打つというのが通常の方法であるが、本組香では異名の札を打つ。すなわち、初めて出た香についてはそれぞれ、「槿斎院」の香には「おり位」の札、「女五宮」の香には「伯母君」の札、「源内侍」の香には「年経る」という、専用に用意された異名の札を打つ。また、二炷目・三炷目には、三種類の地香の名を順にずらして、「槿斎院」の香には「女五宮」の札、「女五宮」の香には「源内侍」の札、「源内侍」の香には「槿斎院」の札を打つ。つまり、異名の札ならばどれでもよいというのではなく、あらかじめ打つべき札が指定されている。また、たとえば、「女五宮」の香を一炷目で聞き違え、「女五宮」の香の一炷目で打つように指定された「伯母君」の札を、二炷目で打ったとしても、聞き当てたことにならない。つまり、三種類の地香については、それぞれ一炷目を聞き当てる<sup>\*</sup>ことが重要で、最初の札を打ち誤ると、その後、同香を聞き当てたとしても、点数にならない場合が生じることになる。

記録は、聞き当てた点数のみを記す。地香は、初香を聞き当てた場合は一点、二炷目は二点、三炷目は三点で、聞き当てた人数は考慮しない。なお、二炷目から、香の名と同名の札を打つ

た場合は、星<sup>\*</sup>を一つ付す。一方、客香の「桃園宮」の香は、聞き当てたのがひとりの場合は五点、二人以上は四点を加える。

蘭之園本では、「一」「二」の香、各三包と「朝顔」の香、五包の計十一包を準備する。「一」「二」の香は、別途、試香をおこなう。まず、「一」と「朝顔」、「二」と「朝顔」のペアを各二組作り、次に、残り各一包の「一」「二」「朝顔」の香から、任意に二包をえらんでペアにし、先のペアに混ぜて計五組としてから二炷聞きにし、余った一包は、「桃園」と称して初香に一炷聞く。聞き<sup>\*</sup>の名目は、「いつき」「おりゐ」「あさがほ」「盛り過」「加茂」「神のいがき」である。竹幽本と比較すると、「桃園」「おりゐ」「あさがほ」といった共通した語の使用も認められるが、竹幽本が専用の札を用い、異名の札を打つといった趣向をもつとは異なり、比較的簡便な方法によっている。

## (2) 『源氏物語』との関わり

香の名目のうち、「権齋院」は、光源氏が権（朝顔）の花につけて和歌を贈ったことにちなんで、朝顔の宮と呼ばれる女性を指す。光源氏のいとこにあたる。齋院（賀茂神社に仕える未婚の内親王）を勤めていたが、父の桃園の宮（光源氏の父である桐壺帝の弟）が亡くなり、服喪のために退下して自邸に戻っていた。その邸に身を寄せていたのが、「女五の宮」（桐壺帝の妹、光源氏の叔母）と、弟子の「源内侍」であり、これらふたりの

呼称も香の名目になっている。「源内侍」は、今は亡き桐壺帝に仕えていた女房で、その後出家し、女五の宮の弟子になっていた。光源氏が、叔母の女五の宮への見舞いを口実に、この邸を訪れ、朝顔の宮に懸想して贈った歌が、巻名歌である。

札裏には前述した登場人物の呼称以外に、「おり位」「伯母君」「年経る」と記される。「おり位」は、齋院を退くことで、「権齋院」の齋院退下を指すのであろう。物語の冒頭には、「齋院は御服にておりゐたまひにきかし。」（②四六九頁）とあり、通常、「下（降）り居」と解するが、竹幽本の表記からは「位」を下りる意と理解していると思われる。「おり位」という解釈は、管見によれば、古注釈の他、『源氏小鏡』『源氏大鏡』などの梗概書にも、今のところ見当たらない。あるいは退位した天皇を指す「おりゐの帝」（若菜上・匂宮）という語句からの誤った類推か。ちなみに、蘭之園本では「おりゐ」と表記する。

また、「伯母君」は、女五の宮を指すと考えられる。現代の注釈書では、権齋院との続柄は、伯母ではなく叔母と解釈するが、古注釈では、女五の宮を「齋院の伯母なり」と指摘している<sup>①</sup>。竹幽本は、この理解に立って作られたと見られる。

最後の「年経る」は、源内侍が源氏に詠みかけた次の和歌の初句「年ふれど」によるものであろう。

年ふれどこの契りこそ忘れね親とか言ひしひと言

## ②（四八四頁）

このように解してくると、最初の札の打ち方である「權齋院の香にはおり位の札」「女五宮の香には伯母君の札」「源内侍の香には年経るの札」は、すべて各々の人物と関わる名目が設定されていることがわかる。

## 21 乙女香

## 【翻刻】

## △乙女香

乙女子も神さびぬらし天つ袖

ふるき世の友齡へぬれば

卷に云、六條京極わたりに、中宮の古き宮の邊りを、四町よまちをしめて造らせ給ふとあるに因て組たるもの也。

一 十炷香の札を用ゆ。」七〇ウ

一 四季の香四包春夏秋冬各一包、源氏の香一包、植物の香五包、ウ二包エ一包モ二包ノ一包

一 四季の香、源氏の香、各外に拵へ試に出す。植物の香は試なし。

一 植物の香五包の内、ウ一包除け、源氏を入れて五包とし打交、其内より又一包取除け、残四包に四季の香一包充組合て上下交て組合置べし四組とし、二炷間に焚」七二オ出して後に、除置た

る二包を能く交て、其内一包を一炷間に焚出すべし残一包は無用。扱て九包皆焚終て、香包紙を一同に開き、点星を定る也。

## 香組合并札打様

二炷間前後の意別なし

春と植物は 桜の房一の札 夏と植物は 橘の房二の札  
秋と植物は 梔の房三の札 冬と植物は 松の房ウの札」七二ウ

春源氏は 紫上一の札 夏源氏は 花散里二の札

秋源氏は 秋好中宮三の札 冬源氏は 明石上ウウの札

## 一炷間

桜は 岩つ、し 一の札 橘は 刈の花 二の札

梔は 秋の野 三の札 松は 籬の雪 ウの札

源氏 六條の院 二の札

一 記録の香、本には春と組たる植物を桜と書、夏と」七二オ組たるを橘と書、秋と組たるを梔と書、冬と組たるを松と書へし。源氏は源氏と認てよし。皆中は間の下に四町と認べし。

一 一炷間に成て札打心得左のごとし。

二炷間内に源氏出たる時

聞覚たる香は 四季の内に組合たるウの香也。

假令、春と組合たる香ならは桜也（朱）。



聞覚ざる香は 源氏と代りたる植物の香也。

假令、秋源氏と組合たれば其代りは梔也(朱)。」七二ウ

右の内一包出る也。

二炷間の内に源氏出ざる時は、

四季の内に組合出たるウの香か、又は源氏香か、両香の内也。

一 記録点星左のごとし。

梔房(朱) 橘房(朱) 独聞三点、二人より二点充。」七三オ

紫上(朱) 花散里(朱) 独聞四点、二人より三点充。

秋好中宮(朱) 明石上(朱) 独聞五点、二人四点 三人より三点充。

岩麝(朱) 知の花(朱) 独聞七点、二人五点 三人より四点充。

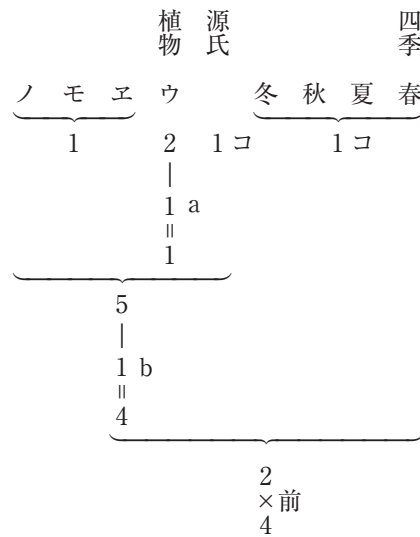
六條院(朱) 聞違、何人にてても星一つ充也。

乙女香之記 ウ除(朱)

〔表〕 七四オ

# 【考察】

(1) 竹幽本組香の方法



1 a + 1 b = 2 | 1 = 1 後

竹幽本では、通常、証歌を挙げてから組香の方法の説明に入るといふ形式をとる。だが、乙女香では、証歌の直後、組香の方法の説明の前に、本組香と『源氏物語』乙女巻の内容との関わりが記されている点が特異である。

さて、本組香では、四季の香(春・夏・秋・冬、各一包)四包、「源氏」の香を一包、植物の香(別香四種類。「ウ」の香を二包、「エ」「モ」「ノ」の香を各一包。)五包の計十包を用意する。このうち、四季の香と「源氏」の香は、別途、試香をおこ



なう。植物の香には、試香はない。従って、「ウ」「エ」「モ」「ノ」の区別は不可能である。試香にない香、四種類が植物の香であると捉える。また、本組香で用いるいずれの香にも客香<sup>\*</sup>を用いない。

まず、植物の香のうち、「ウ」の香を一包除き、「ウ」「エ」「モ」「ノ」各一包にしてから、「源氏」の香を加えて混ぜ、その中から一包を除いて四包とする。これに、四季の香を組み合わせ、二包ずつ四組のペアを作り、二炷<sup>\*</sup>聞きとする（前段）。それから、先に除いておいた二包（「ウ」の香が一包と、「ウ」「エ」「モ」「ノ」「源氏」の香のうちのいずれか一包）のうちの一包を一炷<sup>\*</sup>聞きとして焚く（後段）。以上、全九包を出香とし、残りの一包は用いない。すべて焚き終えてから、包紙を開いて正答を披露する。

なお、後段の一炷<sup>\*</sup>聞きの際、すでに前段で「源氏」の香が出た場合には、「ウ」「エ」「モ」「ノ」のうちのいずれかである。さらに、それが聞き覚えがある香ならば、植物の香の中でも唯一、二包用意されていた「ウ」の香ということになる。また、聞き覚えがなければ、前段で「源氏」の香と入れ替わりに残った「エ」「モ」「ノ」のいずれかである。一方、前段で「源氏」の香が出ていない場合は、逆に「ウ」「エ」「モ」「ノ」がすべて出たということになるため、後段では、あらかじめ取り除けられた

「ウ」の香か、「源氏」の香のいずれかとなる。

答えには、十炷<sup>\*</sup>香札を用いる。前段の二炷<sup>\*</sup>聞きでは、出香の順序の前後は問わず、組み合わせのみで答える。すなわち、四季と植物の組み合わせならば、「春」「夏」「秋」「冬」の順に「一」「二」「三」「ウ」の札を打つ<sup>\*</sup>。一方、四季と「源氏」の組み合わせの場合は、四季の順に「一」「二」「三」「ウ」の札を二枚打つ（竹幽本には、「源氏」と「春」の組み合わせの場合、「一の札」としか記されていないが、前段の札の打ち方から推すと、やはり枚数は二枚であろう）。そして後段の一炷<sup>\*</sup>聞きでは、植物の香であった場合、前段をもとに答えを出す。すなわち、前段で「春」「夏」「秋」「冬」のいずれと組み合わせられていた植物の香であったかによって、順に「一」「二」「ウ」の札を打つ。また、「源氏」の香の場合は、「一」と「二」の札を打つ。

記録は聞き<sup>\*</sup>の名目によって記す。まず、「本」と記された行に書き入れる正答は、「春」「夏」「秋」「冬」とペアになっている植物の香を、順に「桜」「橘」「梔」「松」とし、「源氏」の香は、そのまま「源氏」と記す。その上で、前段では、植物と「春」は「桜の房」、「夏」は「橘の房」、「秋」は「梔の房」、「冬」は「松の房」と書く。また、源氏と「春」は「紫上」、「夏」は「花散里」、「秋」は「秋好中宮」、「冬」は「明石上」とする。そして後段は、前段の四季の香との組み合わせが、「春」の香の場合

は「岩つゝし」、「夏」は「卯の花」、「秋」は「秋の野」、「冬」は「籬の雪」とする。なお、「源氏」の香の場合は、「六條の院」と記す。すべて聞き当てた場合は、名目の最も下の欄に「四町」と記入する。

記録点は、前段の四季の香と植物の香との組み合わせでは、ひとりのみ聞き当てた場合は三点、二人以上は二点となる。また、四季の香と「源氏」の香との組み合わせでは、ひとりのみの場合は四点、二人以上で三点を加える。また、後段では、植物の香の場合は、独り聞きは五点、二人では四点、三人以上は三点となり、聞き違えれば、何人であっても星をひとつ付す。一方、「源氏」の香の場合は、独り聞きは七点、二人で五点、三人以上は四点を加え、聞き違えた時は、人数を問わず、一律に星二つとなる。「源氏」の香に関わる点が高く、また、前段に比して後段の点数の比重が重い。

蘭之園本では、「香組十炷香の例」として、盤物を挙げている。竹幽本とは全く異なる組香である。

## (2) 『源氏物語』との関わり

毎年十一月には、宮中で新嘗祭（天皇が新米を神に献上して食する行事）が催され、五節の舞姫が天女の舞を披露する。それを見て、光源氏がかつて舞姫だった恋人に贈った和歌が巻名歌（③六三頁）である。

その後、源氏は六条通に面した大邸宅を新築する。それは六条院と呼ばれ、竹幽本の冒頭に掲示された物語本文（③七六頁）にあるように、「四町」（二町は一二〇メートル四方）を占め、四つの御殿から成っていた。東南は春の御殿で源氏と紫の上の住まいであり、以下、東北は夏の御殿で花散里、西南は秋の御殿で秋好中宮、西北は冬の御殿で明石の上の住まいである。

本組香では、聞きの名目として、春夏秋冬にそれぞれ「紫上」「花散里」「秋好中宮」「明石上」という、前述の女君、四名の呼称が配される。そしてさらに、春には「桜」「岩つつじ」、夏には「橘」「卯の花」、秋には「楓」「秋の野」、冬には「松」「籬の雪」の名目が組み合わせられる。

このうち「桜」「岩つつじ」「橘」「籬の雪」の四つの名目は、『源氏小鏡』に見当たらない。しかし、物語本文には、「桜」「岩つつじ」「橘」の語を見いだすことができる。残りの「籬の雪」は、物語にも出て来ないが、「籬」は、冬の御殿の描写の中に「菊の籬」として見える。

隔ての垣に松の木しげく、雪をもてあそばんたよりによせたり。冬のはじめの朝霜むすぶべき菊の籬、我は顔なる柞原、をさをさ名も知らぬ深山木どもの木深きなどを移し植ゑたり。（③七九〜八〇頁）

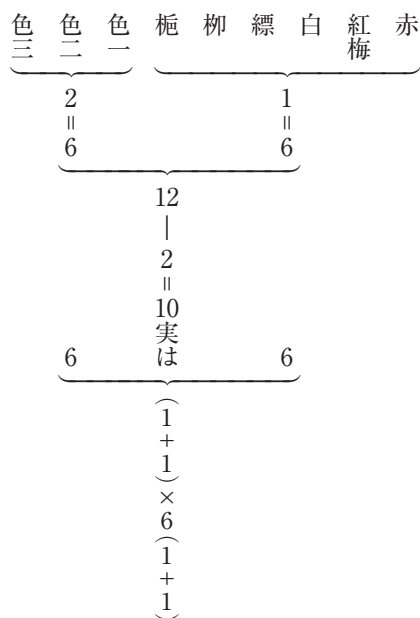
「朝霜むすぶべき菊の籬」は、たしかに初冬の景物としてふさ

わしく、冬の名目をこの箇所から採り出すことも、一見できそうである。しかし、「菊の籬」という語句のみを単独で抜き出した場合、たとえば、「しもを待つ籬の菊のよひのまにおきまふいろは山のはの月」（新古今集・秋下・五〇七・宮内卿・五十首歌）たてまつりし時、菊籬月といへる心を」といった歌のように、冬ではなく、秋のイメージが印象付けられてしまうであろう。そこで、「雪をもてあそばんたより」として「隔ての垣」に松を茂らせたという冬の御殿で、これから見ることができるであろう美しい雪の情景を想像し、「籬」と「雪」とを組み合わせて、「籬の雪」としたのではなからうか。ちなみに、和歌には、籬の菊が雪のように見えるという結題「籬菊如雪」（千載集・秋下・三四八など）もある。

ともあれ、これらのことから、竹幽本が、『源氏小鏡』よりもむしろ、『源氏物語』本文によって組香を構成した可能性を指摘することができよう。

## 22 玉鬘香

（七十四丁裏〜七十五丁表。『社会科学』第43巻第3号参照。）



## 23 初音香

【翻刻】

△初音香

年月を松にひかれてふる人に

けふ鶯の初音きかせよ

一 十炷香の札を用ゆ鶯の香にウを打へし。

一 一の香、二の香、三の香、鶯の香客香なり各三包、都合十二包出

香とす。皆焚終て包紙を開く也。

一 鶯の香斗り試に出すべし。」七五ウ

一二三の香は無試十炷香のことく札を打也。同香三包充の餅と認る。是を第一に聞くべし。

記録、もちゐる同香三炷共に皆聞中れば、三炷ともに二点充かけて都合六点と成る。三炷不残不聞共上下結びて二炷の内にもちゐる香中らば、もちゐる斗は二点なり。又上下結びて中り、終のもちゐる斗中ら」七六オされば、中たる二炷各一点充也。

鶯の香は、試有るゆへに同名の札打也。是も終に出る鶯はねぐらと名付て、初二炷の内、一炷中りて、三炷目のねぐら聞中れは、ねぐら斗は二点なり。三炷共に中れは、二点充かけて都合六点なり。ねぐら一炷斗中れば一点也。ねくらあたらす、外の鶯斗は一点充也。」七六ウ

もちゐ、ねぐらの外は、皆何人聞にても一点充也。もちゐ  
ねぐらの聞違は、星一つ充附るべし。

聞の褒美に左のごとし。

皆中 五葉の松と書  
(ねぐら) 共に聞 池の鏡と書

ねぐら斗聞 初音と書 もちる斗聞 齒がためと書

薄氷と書

記録書様左に記す。」七七才

初音香之記

初音香之記

〔表〕  
七七ウ

## 【考察】

### （１）竹幽本組香の方法

末香

一の餅

二  
二

3

二の餅

三  
12  
三の餅

鶯  
3  
—  
ねぐら

地香「一」「二」「三」の香と、客香「鶯」の香とを、各三包

用意する。通常、試香<sup>\*</sup>は、地香についておこなうことが多いが、

本組香では、客香の「鶯」の香にのみおこなう。客香の試香は、

時々見受けられる。<sup>\*</sup>本香には、これら十二包の香を用い、すべ

て焚き終わってから包紙を開いて正答を披露する。

答えには、十炷香札を用いる。「鶯」の香には「ウ」の札を打

つが、「一」「二」「三」の香には、無試十炷香のように、一炷目<sup>\*</sup>

に「二」の札を打ち、異なる香が焚かれるたびに、順に「三」

「三」の札を打っていく。

記録には、同香三包のうち、いちばん最後（三番目）に出た香を、特に「もちゐ」と称し、「一」「二」「三」の香、それぞれについて、「一の餅」「二の餅」「三の餅」と記す。得点は、同香

を三炷すべて聞き当てた場合は、三炷ともに二点ずつ、計六点となるが、同香三炷のうち、二炷を聞き当て、その中に「餅」の香があれば、「餅」の香のみ二点とし、もう一炷の一点と合わせて計三点である。また、「餅」の香のみ聞き違えた場合は、聞き当てた二炷は各一点となり、計二点となる。「鶯」の香も、いちばん最後に出た香を「ねぐら」と称し、先の地香と同様に得点を計算する。つまり、「餅」「ねぐら」以外は、何人聞きであってもすべて各一点とする。なお、「餅」「ねぐら」の聞き違えは、<sup>\*</sup>星をひとつ付す。褒美のことばは、すべて聞き当てた場合は「五葉の松」、「餅」を一炷以上と「ねぐら」を聞き当てた場合は「池の鏡」、「ねぐら」のみでは「初音」、「餅」のみでは「歯がため」、「餅」「ねぐら」を聞き違え、その他の香のみを聞き当てた場合は「薄氷」と記す。

蘭之園本では、「もちゐ」の香、「鶯」の香を、各六包用意し、別途、試香をおこなう。本香では、この全十二包を混ぜ、二（「三」の誤りか）包ずつ三組を作り、残り三包は一包ずつのままにしておく。そして、まず三包一組の香を聞いて、次に残り三包のうちの一包を聞く。この三柱聞きと一炷聞きを三度繰り返す。得点は、三炷聞きのうちの「もちゐ」を聞き当てると二点、一炷聞きでは三点、その他は各一点である。なお、ひとりのみ聞き当てた場合は二点、二人以上は一点とする。また、聞<sup>\*</sup>

きの名目には、「もちゐ」「うぐひす」「池の鏡」「五（いつ）はの松」「はがため」「はつ音」を用いる。竹幽本においても、蘭之園本と同じ語句を用いて組香を構成しているが、「ねぐら」「薄氷」は、竹幽本にのみ見られるものである。また、三炷聞きと一炷聞きを繰り返す、一炷聞きの得点が高い蘭之園本に対し、同香の三柱目に特別な名付けをし、その得点を高くするといった方法にも、竹幽本の独自性が見られよう。

## （2）『源氏物語』との関わり

初音巻では、新築された六条院で初めて迎えた正月の様子が描かれている。物語では、女房たちが、「歯固めの祝いして、餅の鏡をさへ取り寄せて」（③一四四頁）とあり、そこから名目の「餅」と「歯がため」（長寿を祝って鏡餅などを食べる行事）が採られている。また、「薄氷」と「池の鏡」は、源氏が詠んだ薨ぎの和歌による。

うす氷とけぬる池の鏡には世にたぐひなき影ぞ並べる（③一四五頁）

源氏の娘である明石の姫君は八歳になり、春の御殿で紫の上と暮らしている。実母の明石の君は、六条院の冬の御殿に住みながら、五年前に別れて以来、一度も会えない娘に新年の贈り物をした。「五葉の枝にうつる鶯」（五葉の松の枝に移り留まっている鶯）（③一四五頁）で、それに添えられた和歌が巻名歌で

ある。「五葉松」「鶯」「初音」という名目は、この場面による。もつとも、物語本文には、「五葉松」という語句そのものは見当たらないが、「五葉」が松であることは言うまでもなく、蘭之園本では「五いづはの松」、『源氏小鏡』第一系統では「五いづようの松」とある。<sup>(5)</sup>

姫君からの返礼の和歌を見て感激した明石の上は、次の歌をしたためた。

めづらしや花のねぐらに木づたひて谷のふる巢を問へる鶯  
(③一五〇頁)

終わりに出る「鶯の香」が「ねぐら」と名付けられたのは、この一首によるものである。

## 24 胡蝶香

【翻刻】

△胡蝶香

花ぞのゝこてふをさえや下くさに

あさまつむしはうとく見るらん

一 一炷開也。

一 十炷香の札を用ゆ。

一 一二三客の香、各三包充、都合十二包の内、二包除け、残り

り十包出香とす地香外に瓶 試有。「七八オ

一 山吹方五人、桜花方五人と分つ山吹方上座たるべし。双方に間頭を定め置。

一 舞姫の人形進は、客地香の差別なく陽炷目三中り一間進む。陰炷目八中り二間進すべし。各独間の沙汰なし。

一 六間目の舞臺に至ると、山吹・桜を人形に持する。十間目に至ると、山吹は金瓶にさし、桜は銀瓶にさす。拾五間目に早く至る方を勝とす双方の内にて 七八九多き方勝也。勝たる方は、短冊を花に附る 山吹方は金短冊也。然ども、一方三人の勝ある迄は、勝負付べからず。負たる其相手の人形、假令香は聞中たるとも、一間退くべし。香は残りても、盤の勝負は終也。

一 秋好中宮と紫上の人形は、舞姫同前に進退あるべし。六間目に至ると、檜扇を持する也。扇。七八九拾五間目に至ると、扇を開く也。もし拾五間目に早く至ると、舞姫の人形、拾五間目に至らずとも此人形二つにて勝負定るべし。

一 記録は、中り斗を記す。皆中は聞の下に褒美の名目を朱にて認る、左のごとし。

一 秋好中宮は 胡蝶の哥を一首書

蝶の舞姫は 山吹襲と書カサネ 是は舞姫に 賜ふ品也「七九ウ

紫上は 花園の哥一首を書

鳥の舞姫は 桜細長と書ホソナカ 是は舞姫に 賜ふ品也

胡蝶にもさそはれなまじ心ありて 秋好中宮の哥也。

八重山吹をへだてざりせは

金の短冊に、此哥を片面充、上の句と下の句と分けて認る。又山吹方の聞頭の皆中褒美にも此哥を一首認べし。」

八〇オ

花園の胡蝶おさへや下草に 紫上の哥也。

秋まつ虫はうとくみるらん

銀の短冊に、此哥を片面充、上の句と下の句と分けて認る。又桜花方の聞頭の皆中褒美にも此哥を一首認るべし。

記録認様末に顕す。」 八〇ウ

胡蝶香之記 三ウ除（朱）

〔表〕 八一オ

胡蝶香立物圖

〔図〕 八一ウ

〔図〕 八二オ

同盤之圖 豎溝五筋 横界二十間

〔図〕 八二ウ

# 【考察】

## （1）竹幽本組香の方法

一	二	三	ウ
			3
			12   2    10

\* 本香には、「一」「二」「三」「客」の香を三包ずつ、計十二包を用意し、そのうち二包を除いて、残り十包を出香する盤物である。出香のたびに十炷香札を打ち、一炷開きとする。本香の前に、地香「一」「二」「三」は、別途、試香をおこなうが、「客」には試香はない。

連中十人を五人ずつ、山吹方（上座）と桜花方に分ける。それぞれ秋好中宮と紫上を聞頭（リーダー）とし、蝶の舞姫と鳥の舞姫が、双方に四人ずつ従う。舞姫の人形を盤上に置き、客香・地香の区別なく、陽炷目（一・三・五・七・九炷目）を聞き当てる場合は一問、陰炷目（二・四・六・八・十炷目）の場合は二問進める。いずれの場合にも、聞き当てる人数は、進む目の数に関係しない。

人形が六問目に至ると、山吹・桜の枝を持たせる。また、十問目に到達すると、山吹は金瓶に、桜花は銀瓶にさす。十五問目に早く着いた方が勝ちとなり、双方同時の場合は、十五問目



に至った人形の数の多い方が勝ちであるが、その数が三人になるまでは、勝負を継続する。なお、盤には二十間あるが、六間目から十五間目までを「舞台」と呼び、その境界には、山吹方に金界、桜花方に銀界を施す。

勝った方は、花に短冊を付ける。山吹方は金の短冊、桜花方は銀の短冊である。金と銀の短冊の両面には、それぞれ胡蝶の歌「胡蝶にもさはれなまじ心ありて八重山吹をへだてざりせは」と花園の歌「花園の胡蝶お(を)さへや下草に秋まつ虫はうとくみるらん」を、上句と下句に分けて記しておく。負けた方の人形は、もし香を聞き当てたとしても一問退き、香は残っているても、盤の勝負は終える。

開頭の秋好中宮・紫上の人形も、舞姫と同様に進退するが、六問目に至ると、檜扇(絵扇)を持ち、十問目に進むと、扇を開く。もし十五問目に早く至った場合は、舞姫の人形が十五問目に進んでいなくても、この秋好中宮・紫上の人形によって、勝負が決まる。

記録には、聞き当てた場合のみを記す。すべて聞き当てた時は、記録の最下欄に、褒美のことを朱で書き入れる。すなわち、秋好中宮には胡蝶の歌一首、蝶の舞姫には「山吹襲」、紫上には花園の歌一首、鳥の舞姫には「桜細長」と書く。なお、「山吹襲」と「桜細長」は、舞姫に下賜される品である。

ところで、この竹幽本の方法を翻って考えてみると、前述の人形の進め方によれば、本香すべてを聞き当てなければ、十五間目まで進むことができないことになる。これでは多くの場合、勝負を決することができないことが想定され、また、十五間目に至った数が三人になるまで組香を続行するのも不可能である。これはおそらく、竹幽本が蘭之園本をもとに組香の方法を改変した際の手違いであろう。

蘭之園本では、「香組十炷香の例」として盤物の組香を挙げるが、竹幽本はこれとたいへん似通った内容である。ただし、竹幽本に見える「開頭」の語が蘭之園本にはなく、代わりに開頭の人形を「香大将の持」とするのは、絵合香の場合と同様である。また、竹幽本は「舞台」を六問目からと認識しているが、蘭之園本は五問目からである。そして、蘭之園本が、十問目に最初に到達した方を一の勝とし、その後は香を聞いても人形を進めないとするのに対し、竹幽本は十五問目まで進めていく。この点が、組香の方法として破綻していることは前述のとおりである。さらに、人形の進め方も、蘭之園本は、三炷以上の続け聞きや客香<sup>\*</sup>を聞き当てた場合は二問進むといった方法であるのに対し、竹幽本は、陰・陽で区別する。このように、竹幽本は、蘭之園本を参照しながら、細部において独自性を出しているとしたと推察される。

（2）『源氏物語』との関わり

光源氏の養女である秋好中宮が、六条院に里下がりして、秋の御殿で春の法会を催した際、紫の上から、仏に供える花が贈られた。紫の上は、八人の少女を揃え、四人ずつに蝶と鳥の装束を着せ、蝶には金の花瓶に山吹、鳥には銀の花瓶に桜をさして持たせた（③一七一頁）。秋好中宮からは、御礼として、蝶には山吹襲（表は薄い山吹色、裏は黄色）、鳥には桜襲（表は白、裏は赤）の「細長」（女性の装束）が渡された（③一七三頁）。このとき紫の上と秋好中宮が詠み交わした歌が、竹幽本に記されている。

このように、物語では、紫の上が、蝶・鳥の舞姫に金・銀の瓶と山吹・桜の花を用意したのに応じて、秋好中宮は、山吹襲と桜襲の細長を用意した。これをもとに、盤物では、まず山吹方と桜花方とに分け、前者には秋好中宮と蝶の舞姫に金瓶、山吹と山吹襲、後者には紫の上と鳥の舞姫に銀瓶、桜と桜細長を配置している。

附記

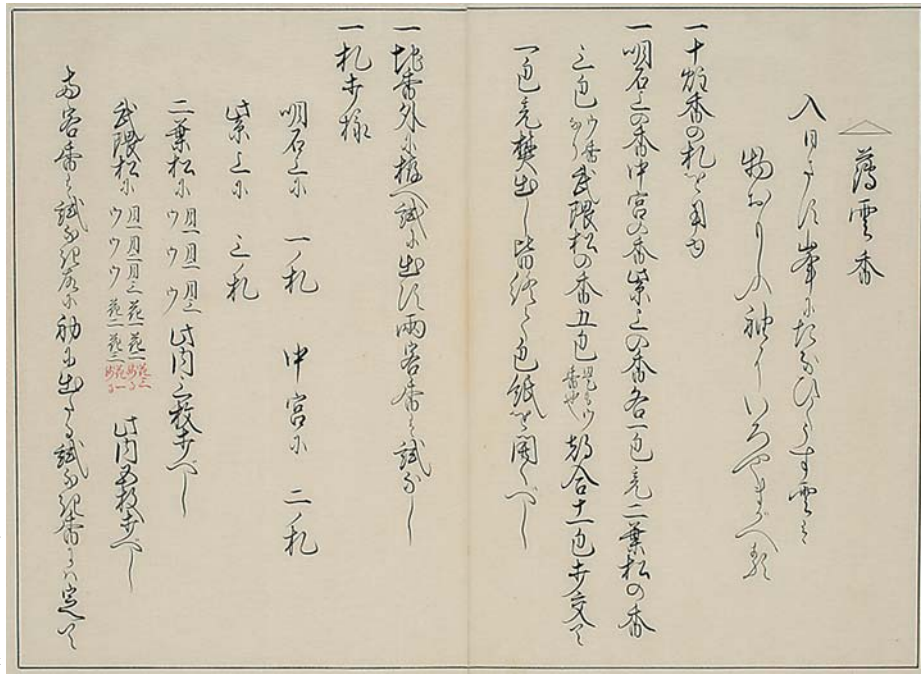
本稿は、「伝統文化形成に関する総合データベースの構築と平安朝文学の伝承と受容に関する研究」（同志社大学人文科学研究所第18期研究会第17研究、および科学研究費助成事業基盤研究（C）課題番号25330403、いずれも平成25～27年度）における研究の一

部である。

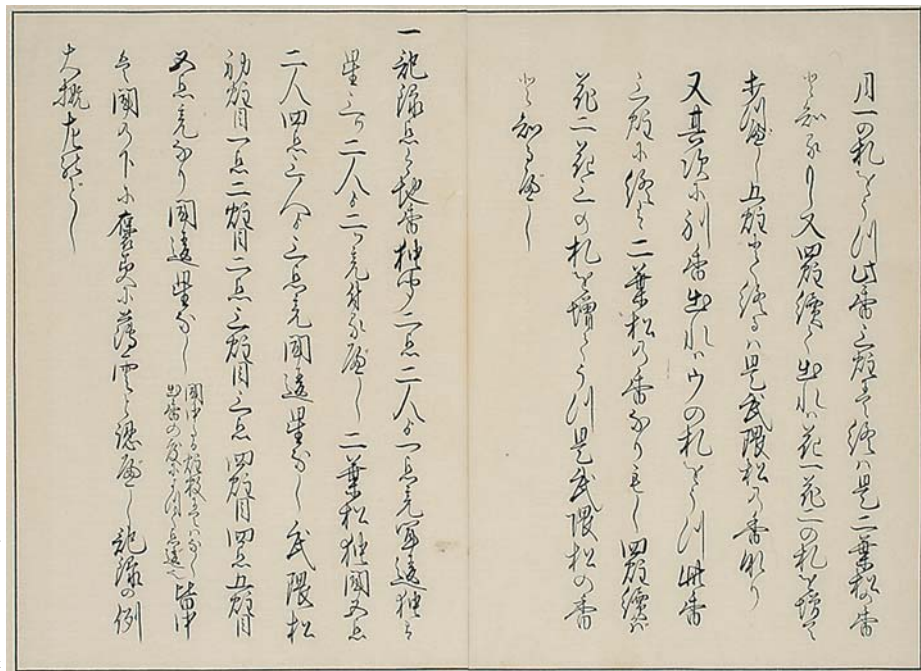
注

- （1）以下、本文は、岩坪健『源氏小鏡』諸本集成（和泉書院、二〇〇五年）による。
- （2）以下、本文は、新編日本古典文学全集『源氏物語』①～⑥（小学館、一九九四～一九九八年）により、その巻数と頁数を（ ）を付して示す。なお、本文は、適宜手を加えた箇所がある。傍線筆者。
- （3）ただし、藤壺は、『源氏小鏡』では、潞標の巻で中宮から女院になったと記され、薄雲の巻では「薄雲の女院」とも呼ばれる。なお、物語では「後の宮」（②四四三・四五一頁）。
- （4）『源氏物語湖月抄』所収の『孟津抄』による。『孟津抄』は、天正三年（一五七五）成。遡って、明応二年（一四九三）頃に成立した『一葉抄』にも、「桃は女五の御弟也」とあり、また、永禄二年（一五五九）頃成立の『林逸抄』にも、「桃園は女五の宮の弟也」とあるが、ともに版本はなく、近世においてそれほど流布していたとは想定し難い。
- （5）『源氏小鏡』第二系統では、第一系統と異なり、物語本文と同じ「五葉の枝」である。蘭之園本が第一系統『源氏小鏡』によることは、武居雅子氏「『源氏千種香』の依拠本を探る」（『総研大文化科学研究』9、二〇一三年三月）に指摘されている。

【影印】 綴じ糸を外し、袋綴じを一丁ずつ開いて撮影したもの。



(六十五丁裏)



(六十六丁表)

(六十六丁裏)















胡蝶香

花ぞのさくらさくらさくら

あゝさくらさくらさくら

一 花開く

一 十燈音のわらわら

一二 三の音の音名をいふ 花令十二色の月二色降る

砂十色出音 花音外に花音あり

一 山原より人形花より人形 山原より人形花より人形

一 舞娘の人形進む 客の音の音名をいふ 陽燈目 一三九

中 二間進む 陰燈目 八十四 中 二間進む

名花の沙花

一二 間目の音名をいふ 山吹花と人形小持と

十間目 山原に金瓶 花 波瓶

より 拾五間目 花より人形 花より人形

(七十八丁裏)

(七十八丁表)

人形の歌 花より人形 短冊と花の歌 山原より人形花より人形

也花より人形 花より人形 花より人形

中 二間退く 花より人形 花より人形

花より人形 花より人形 花より人形

花より人形

一 花中宮 花より人形 花より人形 花より人形

花より人形 花より人形 花より人形

拾間目 花より人形 花より人形 花より人形

早 花より人形 花より人形 花より人形

花より人形 花より人形 花より人形

一 花中宮 花より人形 花より人形 花より人形

名目と花より人形 花より人形 花より人形

花より人形 花より人形 花より人形

花より人形 花より人形 花より人形

花より人形 花より人形 花より人形

(七十九丁裏)

(七十九丁表)





